

Abstract

Internet system for contact and exchange with SMON patients

Kimiya Sugimura¹⁾, Hideki Simizu¹⁾, Masao Takada¹⁾, Chihiro Miwa¹⁾
Masaaki Konagaya²⁾, Mistuo Iida²⁾, Kazuaki Miyata³⁾
Hidetoshi Fukunaga⁴⁾

¹⁾Nagoya University School of Health Sciences

²⁾Suzuka National Hospital

³⁾Nihon Fukushi University

⁴⁾Minamikyushu National Hospital

Internet system may be helpful to resolve anxieties of SMON patients. We tried to know SMON patients could use the internet to get the useful information to resolve their anxieties. We constructed experimental internet home-page for SMON patients, and we provided a column of QUESTIONS & ANSWERS for SMON patients. We asked to try to access the internet and investigated their impression of access to the SMON Internet Home-page. The results of their trial show that almost all of the aged SMON patients are difficult to handle keyboard and mouse of personal computer. Voice input system may be useful to input commands to the computer, if Voice input system is improved to be easy and exact to operate.

新潟県在住スモン患者の実態

佐藤 正久 (新潟大学脳研究所神経内科)

辻 省次 ()

キーワード

新潟県、現況、重症度、合併症

要 約

新潟県内在住スモン患者の実態をとらえ、検診の方向性を考えるために、スモン検診およびアンケート調査の結果を参考にし、患者の現況をまとめた。平成10年度に把握できた新潟県在住患者に12月中旬にアンケート用紙を送付し、返信を得た56人を対象とした。その平均年齢は75歳で23人が検診参加者であった。患者の生活状況としては、36人が外出でき、臥床生活者は5人であった。平均Barthel Index は75.6点であった。スモン患者も老化によると思われる合併症を持つ割合が多く、多くの者が複数の医療機関を受診していた。スモン患者の場合はスモン後遺症を引きずっていることによる身体的、精神的負担を老化に重ねており、自らそれを意識する者も多かった。今後も主治医や地域のパラメディカルスタッフとの連携を持ちながら患者の状況を把握していくことが必要である。

目 的

新潟県地区スモン患者の現況を調査し、地域医療システムの一助とすると共に、検診を含めスモン患者のケアの今後の方向性を考えるうえでの材料とする。

対象と方法

平成10年12月中旬現在で把握できた、新潟県内に在住するスモン患者69人にアンケート用紙を送付した。内容は、検診に常時参加している者には簡単な内容とし、いつも変わらないということで参加していない患者にはスモン検診の内容に準じた詳しいアンケート用紙を送付した。返信は56人(81%)からあり、このうち23人が平成10年度のスモン検診受診者であった。対

象はこの返信者56人として、アンケートの回答を解析した。

結 果

対象スモン患者56人の内訳は、男性13人、女性43人で、平均年齢75.6歳で、最年少52歳、最高齢90歳であった。検診受診者は男性3人、女性23人であった。一日の生活状況では、毎日と時々を含め外出できるものが64%(36人)、家や施設内の移動にとどまる者が7%(4人)、居間や病室で座っている者14%(8人)、寝具の上に身を起こしている者5%(3人)、寝たきり9%(5人)であった(図1)。これらのうちで、寝たきりのみが全員非受診者であったが、それ以外の状況においては2者に大きな差は認められなかった。生活の自立の程度に関してBarthel Index を計算したが、平均は75.8点であった。Barthel Index 自体は100点の者が36%(20人)と最も多く、71点以上が70%(39人)と大多数を占めていた(図2)。しかし、10点以下も9%(5人)おり、完全介護状況のものは減ることはなかった。身体状況、現在の愁訴では、図3に示すように、スモンの症状である、感覚障害、歩行障害、視力障害が多かった。また、老化に伴って起こってきたと考えられる骨関節症状、高血圧、物忘れなども多かった。これに加え、不眠やうつ状態、頭痛や肩こりなどの症状も増えつつある。家族の状況では、1人暮らしが13%(7人)、ほとんどが配偶者とであるが、2人暮らしが25%(14人)、これを含めて、4人以下が68%(38人)であった。介護が不必要と考えているものは24%(13人)であり、これらの多くは1人暮らしの者であった。多くは、配偶者25%(14人)、息子11%(6人)、娘14%(8人)、息子の妻16%(9人)であった。現在診療を受

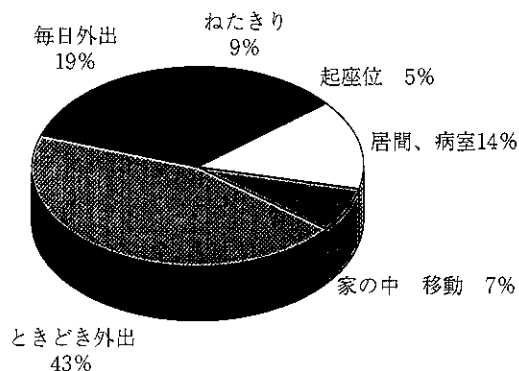


図1 1日の生活状況

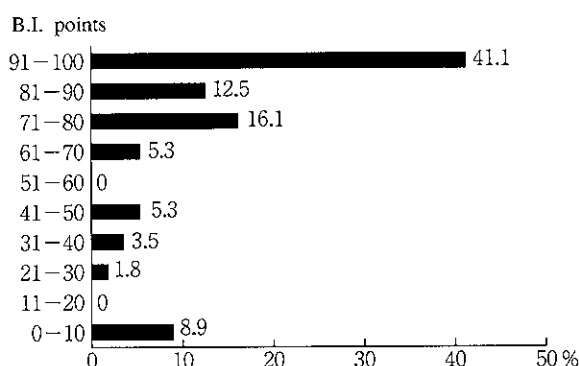


図2 Barthel Index

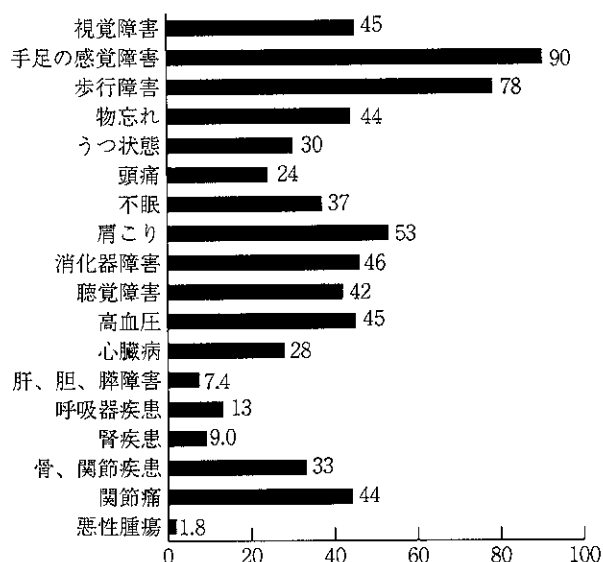


図3 合併症

けているものは88%に及び、多くの者は複数の医療機関を受診していた。受診医療機関数は、回答のあった者では平均2.2カ所であった。15%の者は4カ所以上を受診していた。福祉サービスの利用状況は比較的少な

く、鍼、灸、マッサージ公費負担が41% (23人)、保健所の訪問指導、入浴サービスがそれぞれ9% (5人)、車椅子、装具、松葉杖給付18% (10人) などの結果であった。現在の生活の満足度に関しては、満足、どちらかという満足が36% (20人)、全く不満、どちらかという不満の者が27% (15人)、何ともいえないが38% (21人) のほとんど三分する結果であった。今後の不安に関しては、自分自身の面倒を見てくれる者がいるかというものが46% (26人)、経済的不安44% (25人)、医療に対する不安41% (23人) などが多かった。

考 察

新潟県在住のスモン患者は、多くが医療機関を定期受診しており、主治医を持っているため、スモン検診に対しては参加者が固定化してきた傾向がある。そのため、毎年アンケート調査を行って、検診に参加しない患者群をも含めた全体的な状況を観察するようにしている。今年も検診で状況が把握できなかった患者に対しては例年通りアンケート調査を行い今年度の現況を調査した。

患者全体としての実態はほとんど変わりなく、軽症者が多いが、ADLの低い者の数は少しずつ増えていく傾向にある。その直接の原因の多くは老化によって伴ってくる疾患、すなわち骨粗鬆症の痛みや骨折、あるいは白内障などである。しかし、これら合併症は単に老化によって発症したものでなく、スモンによる機能障害が基盤となっていた例もあり、スモンが間接的な原因となっているという考え方もできる。多くの者はこれらの運動機能の合併症があるために、複数箇所の医療機関を受診していた。家族構成に関しては、独り暮らしのものはADLの保たれている者に限られていたが、配偶者との2人暮らし、あるいは子供との3人暮らしが多かった。独居の者は当然のことながら、2人暮らしでも片方が病気に罹患したときは共倒れとなる可能性があり、子供と3人暮らしでも生活の経済的基盤が不安定なものも多く、今後に関しては不安を持っていたが、基本的には一般の高齢者が持っているものほとんど同じであった。また福祉サービスの利用は少なく、この理由としては、患者側の生活での範囲が狭く、情報収集が困難なことが原因の一つと考えられ

る。福祉サービスの提供をするには患者側からの要請によるより地域の保健所等が患者に積極的にアプローチする事の方が必要と考えられる。

毎年患者調査をしてみると、検診参加に著しく消極的な者があり、その者に検診に参加してもらう方法を考えた時もあったが、現況調査を何年かにわたって続けてみた結果、必ずしも検診に参加してもらわなくても、何らかのかたちで患者とのコミュニケーションができれば問題は少ないと考えた。全体としてみれば、今後は在宅検診の希望がさらに増えることが予想され、将来を考えた医療システムをつくっていかねばならない。現在通院中の主治医や地域の医療スタッフに、病気としてのスモンとその背景にある問題点を知ってもらい、健康や福祉に関する相談ができる環境を作ったり、班員とのコミュニケーションを円滑にしていくことが必要である。

文 献

- 1) 桑原武夫ほか：新潟県地区スモン患者の在宅療養に於ける問題点，厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成5年度研究報告書，P.503-506，1994
- 2) 桑原武夫ほか：新潟県地区スモン患者の合併症について，厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成6年度研究報告書，P.379-380，1995
- 3) 桑原武夫ほか：新潟県在住スモン患者の検診状況とその問題点について，厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成7年度研究報告書，P.384-386，1996
- 4) 桑原武夫ほか：新潟県内在住スモン患者の現況，厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成8年度研究報告書，P.73-75，1997

Abstract

The SMON patients examination in Niigata prefecture

Masahisa Sato¹⁾ and Shoji Tsuji¹⁾

¹⁾Department of Neurology , Brain Research Institute , Niigata University

We have investigated the character of SMON patients who participated the SMON examination in Niigata prefecture in order to improve it in future. We also have conducted a questionnaire survey about activity of daily living, medical and social status of SMON patients in Niigata prefecture. The average age of the patients was 75 years old and thirty one patients had participated the examination, this year. Forty three patients reported that they go out every day or sometimes but there were six bed ridden patients. The averaged Barthel Index was 75.6 points. Many patients were anxious about their future. It is important to increase the number of the patients who participate the examination that the relationship between family doctors of the patients and us and to visit patients who cannot move.

福井県におけるスモン患者の実態調査（平成10年度）

平山 幹生（福井医大内科学(2)）
栗山 勝（ ）
得田 彰（ ）
会田 隆志（福井医大医学部附属病院二内）
濱野 忠則（ ）
金井 昌代（ ）
八十川朋子（ ）

キーワード

スモン、福井県、実態調査、介護、神経症状

要 約

平成元年度の検診データと比較して、下肢の皮膚温の低下が65%から95%へ増加した。感覚障害の末梢優位性が60%から90%へと増加し、高齢化に伴う末梢神経障害の悪化がおりうることを示唆しているかもしれない。また、スモン患者の高齢化とともに四肢関節疾患、脊椎疾患、白内障などの身体合併症の増加がみられた。半数の患者が介護を要したが、外出、移動・歩行が主であり下肢機能の低下を反映していた。最近数年以内で介護が必要になった患者が26%いたが、加齢の影響が推定された。介護に対する不安が半数に見られ、介護者の高齢化や健康問題が主たるものであった。今後の福祉サービスの利用・充実が必要である。

目 的

福井県のスモン患者の実態を把握し今年の患者ケアの基礎資料とするため患者を直接診察し、その経過、現症、医療状況、介護、日常生活等の現状を調査した。また、平成元年度のデータと身体所見など比較した。

方 法

検診はスモン調査研究班、医療システム分科会のスモン現状調査個人票及び介護に関する現状調査個人票にしたがい調査し検討した。

結 果

直接診察した患者は20人、保健婦による面接調査のみは3人であった。

1. 平均年齢は72歳（平成元年：66歳）
2. 身体状況：
 - 歩行：かなり不安定歩行以上の障害55%（50%）
 - 下肢筋力低下：中等度以上65%（65%）
 - 下肢痙縮：60%（70%）
 - 下肢感覚低下：中等度以上80%（80%）、末端優位性90%（60%）、下肢振動覚障害80%（85%）、異常知覚100%（95%）
 - 経過：病初期より悪化40%（25%）、不変10%（45%）、軽減50%（30%）
 - PTR：亢進50%（70%）、正常15%（20%）、低下～消失35%（10%）
 - ATR：亢進35%（20%）、正常30%（25%）、低下～消失35%（55%）
 - Babinski徴候：35%（20%）
 - 自律神経症状：下肢皮膚温低下95%（65%）、尿失禁70%（65%）、胃腸症状75%、便秘25%（50%）、下痢・便秘交代25%（25%）
 - 身体的合併症：95%、種類；四肢関節疾患60%（15%）、脊椎疾患50%（10%）、白内障45%（25%）
 - 精神症候：60%（65%）、種類；不安・焦燥75%、記憶力の低下50%

診察時の重症度：重度以上30%、中等度40%、軽度30%

障害要因：スモン45%、スモン＋合併症50%

3. 日常生活：Barthel Index 87点

生活の満足度：満足43%、何とも言えない9%、不満足48%、転倒した48%

4. 福祉サービスの利用：ホームヘルパー現在利用・利用したい36%、入浴37%、福祉タクシー33%

5. 日常生活の介護：毎日22%、必要な時30%、必要なし48%

介護を要する項目と程度：外出介助要26%、入浴介助要13%

移動・歩行：車椅子7%、介助歩行4%、階段介助17%

主たる介護者：息子・娘43%、配偶者30%

介助の必要時期：スモン発症時26%、2～3年前9%、1年前17%

介護に対する不安：なし17%、あり52%

不安に思う理由：介護者の高齢化、介護者の疲労や健康30%

介護の見通し：家族の介護で自宅22%、家族の介護と介護サービス利用で自宅22%、施設への入所39%

考 察

平成元年度の検診データと比較して、神経症状では感覚障害の経過が病初期と比べ、悪化が25%から40%へと増加したが、一方、軽減が30%から50%へと増加した。また、下肢の皮膚温の低下が65%から95%へ増加した。感覚障害の末梢優位性が60%から90%へと増加し、高齢化に伴う末梢神経障害の悪化がおりうることを示唆しているかもしれない。

また、スモン患者の高齢化とともに四肢関節疾患、脊椎疾患、白内障などの身体合併症の増加がみられた。

約半数の患者が介護を要したが、外出、移動・歩行が主であり下肢機能の低下を反映していた。最近数年以内で介護が必要になった患者が26%いたが、加齢の影響が推定された。介護に対する不安が半数に見られ、介護者の高齢化や健康問題が主たるものであったが、今後の福祉サービスの利用・充実が必要である。

文 献

- 1) 平山幹生ほか：福井県嶺北地域におけるスモン患者の実態調査，厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成元年度研究報告書，P.483-486，1990
- 2) 平山幹生ほか：福井県におけるスモン患者の実態調査（平成9年度），厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成9年度研究報告書，P.85-86，1998

Abstract

Survey of the present status of SMON patients in Fukui Prefecture(1998)

Mikio Hirayama¹⁾, Masaru Kuriyama¹⁾, Akira Tokuda¹⁾, Takashi Aita²⁾
Tadanori Hamano²⁾, Masayo Kanai²⁾, Tomoko Yasogawa²⁾

¹⁾The Second Department of Internal Medicine, Fukui Medical University

²⁾The Second Department of Internal Medicine, Fukui Medical University Hospital

We examined 23 patients with SMON in Fukui Prefecture. Average age was 72 year-old. Compared to the data in 1989 ,the decrease of skin temperature of feet was noted from 65% to 90%. Distal dominant sensory disturbance was noted from 60% to 90%. This might indicate that worsening of peripheral neuropathy due to aging process. As aging process, complications such as joint disease, spinal disease, and cataract increased. Half of the patients needed the care. The items of care were mainly going out, transfer and gait that reflected the impairment of lower extremity. 26% of patients began to need care within a few years, which suggested the influence of older age. Half of the patients had dissatisfaction about care. The main concern was older age and health problem of those who cares the patents. Supply of fruitful welfare service is necessary.

静岡県地区スモン患者の現状について

溝口 功一 (国立静岡病院神経内科)
小尾 智一 ()
芹沢 正博 ()
西山 治子 ()
西村 嘉郎 ()
杉浦 明 (浜松医大第一内科)

キーワード

スモン、静岡県、介護

要 約

静岡県地区のスモン患者の身体状況、生活状況と介護に関する現状を検診を通して調査する。検診はスモン現状調査個人票と介護に関するスモン現状調査個人票をもとに地区検診(富士・静岡・浜松)と在宅検診を行った。参加者は男性5名、女性20名の計25名で、平均年齢は66.2歳であった。診察所見では、手動弁以下の視力障害を持つ患者とつかまり歩行以下の患者も4名であった。感覚障害では、表在覚・深部覚ともに高度障害患者は約20%であった。介護に関する調査では、毎日介護を受けている患者は2名で、ときどき介護を受けている患者は8名であった。患者の不安な点としては、介護者の高齢化と健康状態があげられた。これは、介護不要な患者でも同様であった。将来については、家族と福祉サービスを利用しながら、自宅で過ごしたいと考えている患者が、全体の40%であったが、施設入所を考えている患者も32%みられた。

目 的

静岡県地区のスモン患者の症状・日常生活・介護の面での現状を把握し、現在の問題点を明らかにする。

方 法

検診希望者を静岡県スモン友の会とともに調査した上で、スモン現状調査個人票と介護に関するスモン現

状調査個人票をもとに地区検診と在宅検診を行った。検診では医師による診察、保健婦とMSWによる面接と血液・尿・心電図検査を実施した。

結 果

地区検診は、静岡・富士・浜松の3カ所で平成10年9月に行い、在宅検診は富士市在住の患者自宅で行った。検診受診者は男性5名、女性20名、計25名で、34歳から89歳、平均年齢は66.2歳で、新規受診者はいなかった。地区検診受診者は23名で、静岡8名、富士9名、浜松7名で、在宅検診受診者は1名、当院通院中の患者1名であった。

診察所見上は、視力障害(図1)で「全盲」1名、「明暗のみ」1名、「手動弁」2名で、「新聞の大見出しが読める」「新聞の細かい字が読める」は合わせて21名であった。

運動機能(図2)においては、「歩行不能」1名、「要介助」1名、「つかまり歩行」2名、「松葉杖」1名、「一本杖」2名であった。「不安定独歩」以上の患者は18名であった。

Barthel Indexでは、35点・55点が各1名、85点2名、95点以上の患者が21名であった。

感覚障害(図3)では、表在覚障害の範囲は乳以下1名、臍以下12名、そけい以下4名、膝以下8名であった。触覚・痛覚ともに高度障害は4名、振動覚の高度障害は6名にみられた。常に不眠になるほどの高度

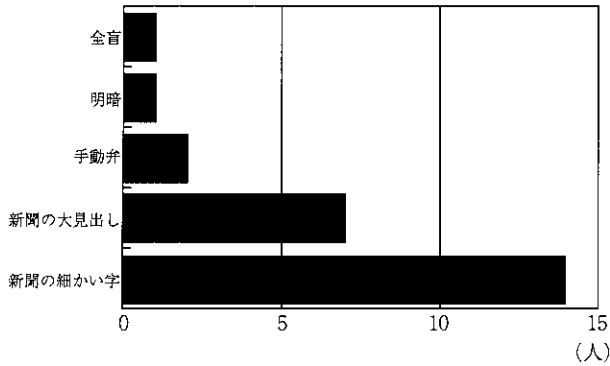


図1 視力

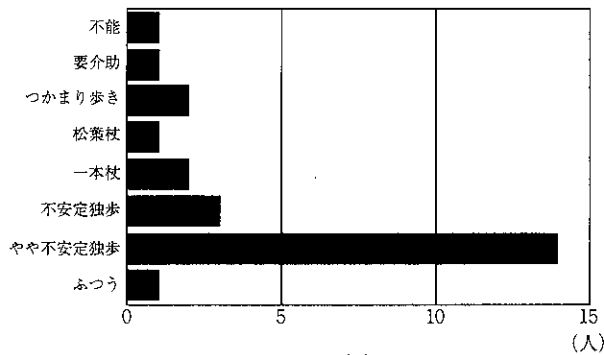


図2 歩行

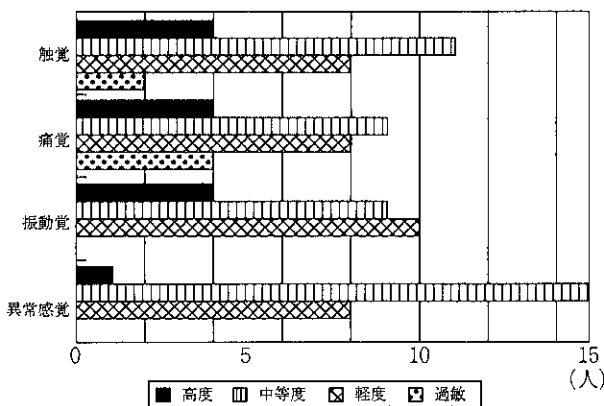


図3 感覚障害

の異常感覚を有している患者は1名のみで、日中でも気になる程度の中程度の異常感覚は15名にみられた。

介護に関する調査では、「毎日介護が必要」は2名、「ときどき介護が必要」は8名であった。これら要介護患者10名の平均年齢は63.0歳で男性3名、女性7名であった。「毎日介護が必要」な患者の2名はBarthel Indexが55点、35点であったが、「ときどき介護が必要」な患者の6名はBarthel Indexが95点以上であった。要介護患者の主な介護者は「配偶者」が4名、「兄弟」3名、「母親」・「娘」・「公的ヘルパー」各1名で、ヘルパーを除いた介護者の平均年齢は63.5歳であった。

将来に対して、要介護患者・介護不要患者ともに、不安を感じている患者はそれぞれ、8名、11名みられた。不安の内容は、要介護患者・介護不要患者ともに「介護者の疲労や健康状態」と「介護者の高齢化」が多く、要介護患者では60%に達した。介護不要患者の中には、「介護者が働いているため介護が不十分」あるいは「介護者がいない」を不安な点とした患者が計5名みられた。また、「介護サービスを受けたくても提供機関がない」と感じている患者が両患者群でそれぞれ1名みられた。

将来の希望では、要介護患者では、「家族とサービスを利用して自宅で」と「施設入所を」とする患者がそれぞれ40%みられた。また、介護不要患者では「家族とサービスを利用して自宅で」と「施設入所を」がそれぞれ約1/3いた。

考 察

検診受診者数は平成7年度以降は20名以上を確保できているが、昨年度よりも、在宅検診希望者が減少しただけ、今年度の総受診者数は減少した。また、在宅検診の方が、重症者が多いことを反映してか、今年度の方が、視力・運動機能・感覚障害いずれも、昨年度よりも、軽い患者が多かった。

介護に関する調査では、毎日介護を受けている2名は視力・運動機能ともに重篤な症状を有している患者である。また、Barthel Indexが95点以上の患者でも、時々介護を受けている患者が6名いた。こういったことから、介護不要患者の中でも、将来に対する不安の内容として、介護者がいないことをあげている患者が、4名おり、こういった患者は、本来は、時々介護が必要である可能性があると思われた。

現在の介護状況がどうであれ、家族と福祉サービスを利用して、自宅で将来過ごしたいと考える患者と将来施設入所を考えるという患者がほぼ同数であったことは、家族の状況に関わらず、自宅で過ごせるような福祉サービスの充実が望まれるところである。

文 献

- 1) 溝口功一ほか：静岡県在住スモン患者の検診結果と検診に関するアンケート調査結果について、厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成9年度研究報告書、P.87-90、1998

Abstract

A follow-up study of patients with SMON in Shizuoka Prefecture in 1998 and questionnaire about the health examination

Kouichi Mizoguchi¹⁾, Akira Sugiura²⁾, Haruko Nishiyama¹⁾
Masahiro Serizawa¹⁾, Tomokazu Obi¹⁾, Yoshirou Nishimura¹⁾

¹⁾Department of Neurology, National Shizuoka Hospital

²⁾Department of First Internal Medicine, Hamamatsu University School of Medicine

Twenty five patients (5 males and 20 females, mean age 66.2 years old) with SMON were investigated in Shizuoka Prefecture in 1998. Twenty-four patients were examined in National Shizuoka Hospital and regional health care centers in Hamamatsu and Fuji, and a patients in their homes. The severity of SMON was milder in this year than in the last year. Ten patients needed care. Two-third patients were afraid of aging, tiredness and health of thier relatives who cared for SMON patients. Although nine patients wanted to stay in thier home with thier family using public welfare service, eight patients would be in welfare facilities.

スモン患者集団検診における血液・尿検査

—1998年度—

加知 輝彦 (国療中部病院神経内科)

山田 孝子 ()

白井 哲也 () 研究検査科)

キーワード

スモン、合併症、集団検診

要 約

スモン患者集団検診を受けた患者18名に対し、採尿、採血を行った。評価は7名が異常なし、9名が軽微な異常、2名が軽度ないし中等度異常であり、重度の異常と判定された患者はなかった。とりわけ多少なりとも異常を呈する患者では今後の追跡調査とともに、内容によっては積極的な治療も必要であると考えられた。

目 的

現在のスモン患者の多くが高齢者であり、患者の介護を考える上で合併症を早期に発見し治療することも重要な課題である。本研究はスモンにおける合併症を血液、尿検査でチェックし、縦断的に追跡するとともに長期療養に役立てることを目的とする。

方 法

対象は1998年度愛知県スモン患者集団検診を受けた患者18名 (男5名、女13名、検査時の年齢49～83歳) である。集団検診は愛知県半田保健所で行われた。

これらの患者に対し、検診場での受け付け後に採尿、採血を行った。血液では血算、総蛋白、アルブミン、血清諸酵素など肝機能関係、尿素窒素、クレアチニン、電解質、血糖値の検査を、また、尿では蛋白、糖の半定量、ウロビリノーゲン、潜血反応などを行った。

測定値と検査全体の傾向とから1) 異常なし、2) 軽微な異常 (機会をみつけ医療機関を受診した方がよ

い)、3) 軽度ないし中等度異常 (医療機関で相談した方がよい)、4) 重大な異常 (早期に医療機関を受診した方がよい) の4段階で判定、評価し、担当保健婦を通じて結果を患者に還元した。尚、集団検診時に特には食事制限は行わなかった。

結 果

評価は異常なし7名、軽微な異常9名、軽度ないし中等度異常2名であり、重度の異常と判定された患者はなかった。

軽微な異常と判定した9名中3名は尿潜血反応陽性、2例は軽度の蛋白尿のみで、いずれも臨床的には問題がなかった。残り4名では軽度の肝機能障害や末梢血中白血球減少、血小板の軽度減少がみられた。軽度ないし中等度異常では明らかな蛋白尿+尿潜血反応陽性1名、蛋白尿+貧血1名であった。

今回の受診者のうち15名では以前にも同じ検査を行っていたが、前回より評価が悪くなっていたのは3名、良くなっていたのは4名で、その他は不変であった。

考 察

今回の検査では多くの患者で多少なりとも異常所見を呈していたが、殆どは臨床的に問題になるものではなかった。しかし、約1割の患者では注意すべき所見を呈し、更に追跡が必要と思われた。この種の検査ではいかに患者にフィードバックしていくかということも重要で、患者の検診後の調査も含めさらに検討する必要があると思われた。

Abstract

Laboratory findings in group medical examination for patients with subacute myelo-optico-neuropathy (SMON)

Teruhiko Kachi¹⁾, Takako Yamada¹⁾ and Tetsuya Usui²⁾

¹⁾Department of Neurology, Chubu National Hospital

²⁾Department of Clinical Research Laboratory, Chubu National Hospital

Group medical examination was carried out in Aichi Prefecture in 1998, and eighteen patients with subacute myelo-optico-neuropathy (5 males and 13 females; age 49-83 years) participated in the examination. Blood chemistry, complete blood count and urinalysis were examined. No abnormality was found in 7 patients, and 9 showed minimal abnormalities such as positive urinary occult blood, questionable proteinuria, mild liver dysfunction and leukocytopenia. Mild or moderate abnormal findings were observed in 2 patients. Proteinuria and positive urinary occult blood were observed in one patient, and the other patient showed proteinuria and anaemia. There were no patients showing severe abnormalities. The results suggest that the follow-up studies and medical treatment are needed especially for the patients with mild or moderate abnormalities.

スモン患者の在宅療養を可能とする条件を探る —在宅療養患者へのアンケート調査より—

小西 哲郎 (国療宇多野病院)
 官川いずみ (〃 看護部)
 永見 恵子 (〃 〃)
 三浦永津子 (〃 〃)
 梅田 敏子 (〃 〃)
 谷口友佳子 (〃 〃)
 高鳥 郁子 (〃 〃)
 扇谷 智子 (〃 〃)
 小山 洋子 (〃 〃)

キーワード

スモン患者、在宅療養、QOL

目 的

在宅療養患者の障害の程度、介護状況、療養環境、社会資源の活用状況についてアンケート調査をし、在宅療養を可能とする条件を探る。

方 法

- 1) 研究期間：平成10年9月～12月
- 2) 対 象 者：京都府在住スモン患者91名
- 3) 方 法：郵送によるアンケート調査

結果と考察

アンケート調査の回収率は70.3%であった。

障害の程度について、視力は「ぼやけて見える」「ほとんど見える」が79%を示した(図1)。歩行状態については、殆どの人に転倒の経験があっても、「一本杖で歩ける」「ふらつきながら歩ける」が56%を示した(図2)。ADLの状況では、自立、または一部介助が約半数以上を示している(図3)。「必要なときに介護してもらっている」が47%「介護は必要ない」が34%と多く、「毎日介護をしてもらっている」は14%と少なかった(図4)。このような結果から、必要時に介護が受けられ、ADLがある程度自立してい

るならば、在宅療養は可能であるといえる。

介護者の状況については、家族、知人および福祉サービスによるものであった。家族による介護では、配

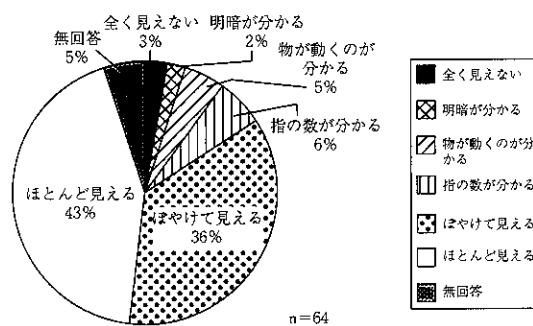


図1 視力

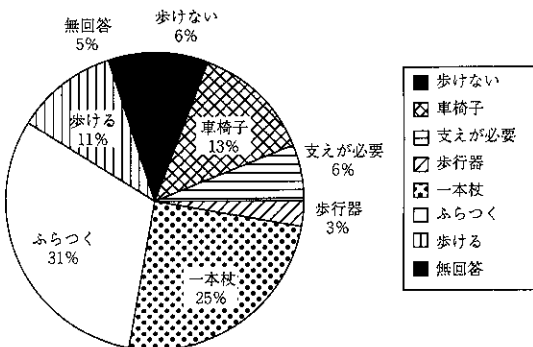


図2 歩行状態

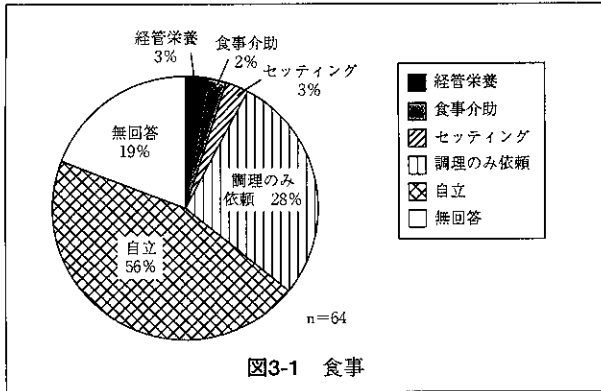


図3-1 食事

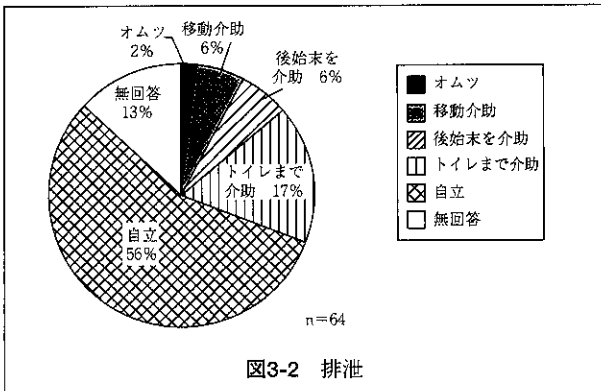


図3-2 排泄

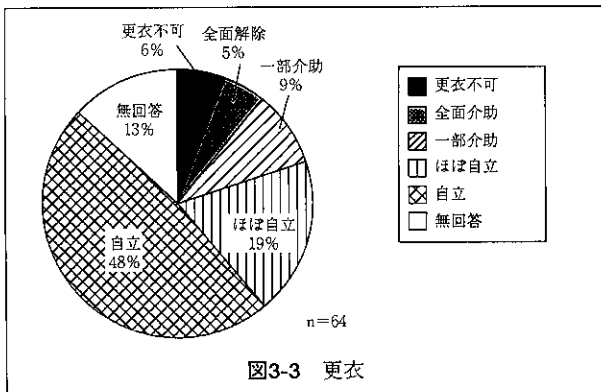


図3-3 更衣

介護を必要とする場合は、ホームヘルパーや別居している家族を頼っていた。このことから、身近な家族の存在や、社会資源の活用で介護を補い生活できることが在宅療養をしやすくしていると考えられる。

不安についての質問で「ある」が70%を示した(図5)。その中で、多かった理由としては、「介護者の疲労や健康状態」「介護者の高齢化」であった(図6)。

今後の見通しについては、「いずれは施設への入所を考える」が25%であった。一方「家族の介護を受けながらこのまま自宅療養できる」「家族の介護と介護サービスの利用を組み合わせれば自宅療養できる」は30%であった(図7)。福祉サービスについては、「利用経験がある」が33%、「今後利用したい」が63%を示している。以上のことから自宅療養を望む人が多く、今後、介護者も高齢になり介護負担が大きくなるため、社会資源活用の必要性は増してくると考える。

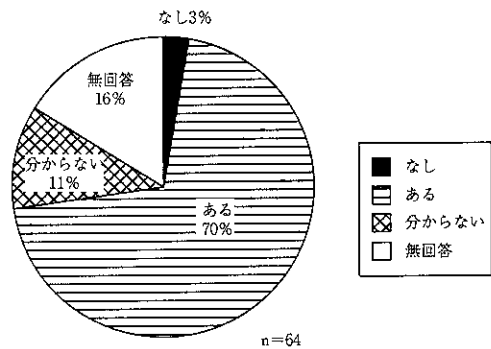


図5 不安

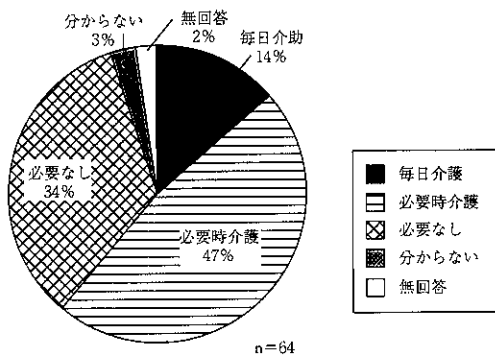


図4 介護状況

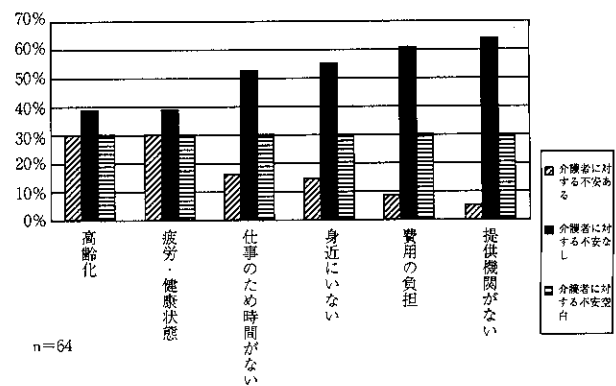


図6 介護者に対する不安

偶者が34%と最も多く、次いで子供が30%で、その他の介護者は13%であった。また、一人暮らしは14%で、

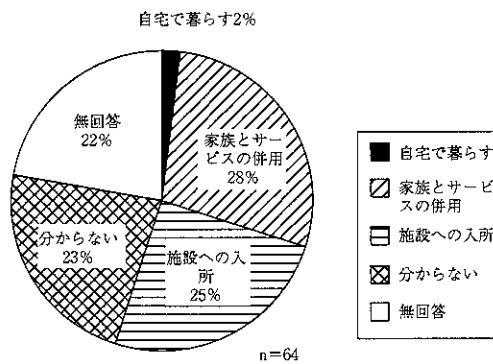


図7 今後の見通し

結 論

在宅療養を可能とする条件として、

1. ADLがある程度自立しており、介護は必要時でよい。

2. 身近に介護者がいる。

の二点が考えられる。

しかし、福祉サービスなど社会資源の活用も必要となり、さらに情報を提供することが私たちにできることだと考える。

Abstract

Some conditions for medical cares at home in patients with SMON

Tetsuro Konishi, Izumi Miyagawa, Keiko Nagami, Etsuko Miura, Toshiko Umeda,
Yukako Taniguchi, Kuniko Takatori, Tomoko Ohgiya, Yoko Oyama

Utano National Hospital

In order to know the factor which enables SMON patients' to take the medical treatments at home, we surveyed on the level of the disability, the nursing care condition and the use of the social resources of the SMON patients who stay at home. We sent the questionnaires by mail to 91 SMON patients who live in Kyoto prefecture, and gained the replies from 70.3% of them.

The necessary factors we made out from the results of the survey are as follows:

1. Patients'ADL being independent on certain level, and their necessity of the nursing carers are only when it requires.

2. Nursing carers being always at close range of the patients.

Furthermore, it is revealed that there are a number of patients who prefer the medical treatments at home by using welfare services, even they feel anxiety over the fatigues, health conditions and aging of the people who take care of them. From now on, as the carer ages, the task of the nursing will fall on him. Accordingly, we are under the necessity of exploiting the social resources.

兵庫県のスモン患者訪問検診（平成10年）

高橋 桂一（国療兵庫中央病院）
 多田 和雄（　　　　〃　　　　神経内科）
 陣内 研二（　　　　〃　　　　〃　）

キーワード

SMON、Hyogo Pref、home visiting、complication、aging、care-giver

要約

本年度は従前より行ってきた兵庫県下のスモン患者の訪問検診を未検診者地区を含めて行った。年齢は64～89歳、女性7名、男性2名で、障害度は軽度7名、中等度1名、重度1名の計9名である。合併症は糖尿病、高血圧、橋本病、甲状腺機能亢進症、関節リウマチ、肺気腫、変形性脊椎症、白内障、脳出血などであり、乳癌術後が2症例あった。高齢化にともなって種々の合併症が増えている。家族を含め介護が益々問題となりつつある。

目的

兵庫県におけるスモン患者の訪問検診を行い、問題

点を検討し、療養指導を行う。

方法

医師1～2名、看護婦、兵庫県スモンの会会長、運転手で訪問日を予め打ち合わせ、計9名の訪問検診を行った。また訪問検診が実施できない状況を打ち合わせの時の対応から推測した。

結果と考察

従来行ってきた重症者優先順の検診方針に従って、訪問検診を行った。現在は比較的軽症の検診段階に至っている。検診希望者が減っていることもあり、再度の検診例も含めた。

重度が1名、中等が1名、軽度が7名、住所は、養父郡養父町3名、神戸市5名、尼崎市1名の計9名の自宅訪問を行い検診と調査を行った。結果の概要を表1に示す。

表1 スモン患者訪問検診の概要（1998）

No	性	年齢	発症年齢	視力 発症時/検診時	合併症	歩行 発症時/検診時	表在覚 範囲	異常覚	障害度	主な合併症	介護者	問題点
1	男	64	35	5/5b	老	6/6b	3中	中等	軽度	糖尿病 高血圧	必要なし	合併症治療中
2	女	65	34	5/5b	老・近	1/6b	3軽	中等	軽度	橋本病 乳癌術後	必要なし	夫の介護 合併症の治療
3	女	65	37	6/5b	老	3/7	5過敏	中等	軽度	頸および腰椎症	必要なし	合併症治療 母の介護
4	女	69	37	6/5b	白内障	1/6b	2過敏	中等	軽度	RA 高血圧	必要なし	合併症の治療
5	女	70	35	3/5b	白内障	1/6b	4中	中等	軽度	CVD 甲状腺↑ C肝炎	必要なし	合併症の治療 乳癌術後
6	女	71	40	5/5a	白・老	1/6a	3軽	中等	中等	白内障 高血圧	必要なし	痙性麻痺の治療
7	女	71	35	6/5b	老	3/7	2軽	中等	軽度	肺気腫 RA	既婚の娘	労作時呼吸困難 要訓練
8	女	83	51	5/5a	白・老	1/6a	2過敏	中等	軽度	高血圧	必要なし	高血圧の治療
9	男	89	59	6/2	白内障	1/2	3軽	中等	重度	白 高血圧 肺気腫	妻	合併症の治療

視力：1.全盲 2.明暗のみ 3.眼前手動弁 4.眼前指数弁 5.軽度低下（a：新聞の大見出しは読める、b：新聞の細字をなんとか読める）
 6.略正常

歩行：1.不能（1+：車椅子） 2.要介助 3.つかまり歩き 4.松葉杖 5.一本杖 6.独歩（a：かなり不安定 b：やや不安定） 7.正常

表面知覚の範囲：1.乳（以上：↑ 以下：↓） 2.臍以下 3.そけい部以下 4.膝以下 5.足首以下 6.なし

白：白内障 老：老眼 近：近視

養父郡養父町の訪問検診は今回が初めてであり、3名の検診を行った。

総じて高齢化に伴う合併症とその治療が益々重要になってきている。関節リウマチを新たに合併した例が2例あったが、難治性疾患のため、スモンの療養状況を悪くしていた。乳癌の術後経過観察中の例が2例あり、精神的負担が重なっている。症例6は痙性麻痺が著明で抗痙縮剤の適応と考えられたが、現状を受容しており、また薬物療法への不信もあると考え服薬はつよくは勧めなかった。症例7は昨年度当院外来を受診し、肺気腫による労作時呼吸困難と診断し、療養指導を行った例である。誘因は長期にわたる喫煙であり、禁煙と呼吸訓練を指導していたが、実行せず、今回の検診時では症状は悪化していた。永年かかっていた近隣の内科開業医に紹介はしていたが、近くの病院の内科の呼吸器外来を受診し臭化オキシトロピウム(テルシガン) エロゾールを吸入していた。肺の喘鳴はこれまで聴かれたことはない。禁煙が等閑に付されていたので、その必要性を説き、呼吸訓練法を家族同席で指導した。夫は平成6年より脊髄梗塞のため半身不随で自宅療養中であるが、夫と共に閉め切った部屋で喫煙をする状況であった。その後兩人とも禁煙を実行し、その後介護にあたる既婚同居の娘の表現では元気にやっていますとのことであった。夫の健康管理にもつながれば良いと思われた。

家族の疾病のためスモン患者がその介護にあたらざるをえなくなった症例や家計を支える必要に迫られた例も含まれている。

症例9は阪神淡路大震災の被災者で、家屋が壊滅し、直後は極めて狭隘なところで療養していたが(文献2、症例11)、娘夫婦の努力により、鉄筋の住居に移り、療養環境は改善していた。白内障が悪化し視力は明暗のみであった。スモン発症時の視力は正常であり、高齢ではあるが手術の適応はあると考えられた。肺気腫と気管支拡張症が著しく、歩行も極めて困難で手探りで2mを20秒で歩き用便を足していた。84歳の妻が昼夜に亘り介護にあっていた。患者および介護者の高齢化が問題であり、今後住居と介護者の対策が必要と

なる例である。

兵庫県スモンの会会員のうち訪問検診未施行例は20名以下になった。そのうち同会長から直接電話をかけ、訪問検診の希望の有無を聞き、あるいは訪問検診の申し入れにたいする反応(理由)を聞いた結果を表2に掲げた。いらぬは必要がないことと、当班の検診に対する表現が含まれている。それぞれの理由は理解できるものが多い。昭和63年度に行った兵庫県下のスモン患者の保健婦による訪問調査によると³⁾、この17名から他府県在住の4名を除いた13名の中、1名が保健婦の訪問拒否をし、1名が妻の陳述による調査による対応であった。残る11名は保健婦の訪問調査には応じたことになる。遠いからと答えた兵庫県の1例は例年の訪問可能距離内にある。しかしながら時間やその他

表2 訪問検診のできない理由(兵庫県スモンの会)

いらぬ	2
働いている	2
家で書道を教えている 曜日が合わない	1
家の中を見られたくない	2
おもてなしできないから	1
きちんと受診しているから	1
施設に入所しているから	2
家族が賛成しない	1
遠い(兵庫県内)	1
遠い(大阪府 岡山県 熊本県 宮城県)	4

17名

の調整を行っても訪問検診が可能となる例は少ないと考えられた。

文 献

- 1) 高橋桂一ほか：兵庫県のスモン患者訪問検診(平成9年), 厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成9年度研究報告書, P.96-98, 1998
- 2) 高橋桂一ほか：阪神・淡路大震災地区のスモン患者訪問検診(平成7年), 厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成7年度研究報告書, P.421-423, 1996
- 3) 高橋桂一ほか：兵庫県のスモン患者の現状と対策, 厚生省特定疾患スモン調査研究班・平成元年度研究報告書, P.526-528, 1990

Abstract

Home visting examination of the patients with SMON in Hyogo Prefecture in 1998

Keiichi Takahashi , Kazuo Tada and Kenji Jinnai

Department of Neurology, National Sanatorium Hyogo Chuo Hospital

Home visiting examination and interview to the patients with SMON were done in October 1998 in Hyogo Prefecture.

Nine patients, 2 males and 7 females, between 64 and 89 years of age were visited and examined. Diabetes mellitus, hypertension, Hashimoto disease, hyperthyroidism, spondylosis deformans, rheumatoid arthritis, hepatitis C, cataract, emphysema and cerebrovascular accidents are their complications. Some patients were unavoidably taking care of their family members with diseases. Previously reported patient, 89 years of age this year, whose house was lost by the Hanshin-Awaji Earthquake in 1995, got better environment and less respiratory distress but worsen visual acuity because of cataracts. One 71 year-old female patient developed exertional dyspnea because of lung emphysema. Abstinence from smoking and respiratory exercise brought her better activity of daily living. Care problems became more obvious in SMON patients with increasing complications.

島根県におけるスモン患者の実態調査

北川 達也 (国療西鳥取病院)
下田光太郎 ()
井上 一彦 ()
金藤 大三 ()
土居 充 ()

キーワード

スモン、島根県、バーテルインデックス、ADL、在宅介護

要 約

島根県のスモン患者は把握できたところでは36名であり、平成9年度、10年度に互って24名の在宅検診を行った。この24名のスモン患者の現状と合併症の有無、そしてバーテル・インデックス(BI)と日常生活動作(ADL)の状況、家族構成と在宅介護の問題について検討した。痴呆を認めた者はなく、在宅での介護は良好であり、在宅で意欲的に生活をしていた。

目 的

島根県在住のスモン患者の検診を行い、スモン患者の現状と合併症、ADLの現状、家族構成、在宅での生活、介護の状況などについて調査検討する。

対象と方法

把握できた島根県在住のスモン患者の総数は36名であった。この36名全員に在宅および集団検診を希望するかどうかについてアンケート調査を行い29名の回答を得た。在宅または集団検診を希望する人は18名、検診を希望しない人が11名、返事のなかった人が7名であった。

平成9年度には島根県西部地区と島根県東部地区に分けて14名の在宅検診を行い、病気の現状調査、生活介護状況などの調査をした。平成10年度は9年度に検診の行えなかった人に再度、在宅検診についての都合

を聞き、10名の在宅検診を行った。この24名を対象に検討した。男7名、女17名、年齢は50歳から90歳で、50歳代5名、60歳代7名、70歳代7名、80歳以上5名、平均年齢69.8歳であった。

結 果

日常生活動作をみると、寝たきり1名、日常生活動作で家族の介護が必要なもの2名、室内の日常生活動作が何とかできているが、全く援助なしに生活することは困難なもの5名、介護の必要のないものまたは外出のときなどに家族の援助を受けているもの(すべてBI90以上)16名であった。合併症としては脳梗塞1名、C型肝炎2名、変形性膝関節症2名、心筋梗塞1名、高血圧2名、白内障3名、そして骨折の既往をもつものが多く、腰椎の圧迫骨折2名を含めて11名(45.8%)にも及んだ。Birthe Index でみると、5点1名、40点1名、70点2名、80~85点4名、90~95点5名、100点11名であった。スモンによる視力障害が3名あった(表1)。

ADLの自立は加齢との関連が強く、80歳以上の5人はすべてBIが85以下であった。BIが90以上のものの16名では何とかADLは自立できていた。この16名の年齢をみると50歳代5人、60歳代5人、70歳代6人であった。

同居している家族数をみると、独居が5名、2人が6名、うち夫婦だけの者4名、娘と同居1名、母親と同居1名。3~5人家族の人が5名、6人以上の大家

表1 スモン患者24名の現状、在宅介護状況

症例	年齢	性別	発病年齢	身体的障害	B I	合併症	骨折の既往	家族構成	介護状況
1	81	女	54	寝たきり	5	白内障	+	5人(息子家族)	嫁
2	74	女	46	左片麻痺	40	脳梗塞、白内障	+	2人(夫婦)	夫
3	85	女	52	両下肢拘縮	70	白内障		3人(息子夫婦)	娘
4	65	男	31	視力障害	70			独居(未婚)	妹、ヘルパー
5	68	男	42	左足の拘縮	80	C型肝炎		4人(妻、娘)	妻、娘
6	90	女	55		80			9人(息子家族)	嫁
7	87	女	61		85		+	独居(死別)	娘
8	83	女	51		85	変形性膝関節症		独居(未婚)	友人
9	68	女	37		90	高血圧	+	3人(息子夫婦)	息子夫婦
10	57	女	26		95		+	3人(夫、息子)	/
11	68	男	37		95	心筋梗塞	+	6人(妻、息子家族)	妻
12	65	女	38	視力障害	95			8人(息子家族)	息子夫婦
13	63	女	34		95	C型肝炎	+	独居(離婚)	/
14	78	女	47		100	高血圧		2人(夫婦)	夫
15	76	男	45		100	変形性膝関節症		4人(妻、息子家族)	妻
16	74	女	46		100		+	6人(養息子家族)	息子夫婦
17	73	女	44		100		+	独居(死別)	/
18	70	男	38		100			6人(妻、息子家族)	/
19	70	男	40		100		+	6人(妻、息子家族)	/
20	63	女	30		100	高血圧	+	2人(夫婦)	/
21	59	女	31		100			8人(夫、息子家族)	夫
22	54	女	26		100			2人(夫婦)	夫
23	53	女	25		100			2人(母)	母
24	50	女	19	視力障害	100			2人(娘)	娘

B I : Barthel Index

族の人が8名であった。子供や孫たちと同居している3世代家族の人は家族に支えられて在宅の生活ができていた。将来寝たきりになったときの家庭介護は難しいのでその時は施設に入りたいとか、そのときになってみないと分からないという人が大多数であった。

考 察

把握できた島根県スモン患者36名に対して検診についてのアンケート調査をした。検診を希望した人は半数であった。長年の掛かり付けの主治医がいて健康管理をしてもらっていること、発病して30年を経ている今さら効果ある治療は期待できないことなどの理由でわざわざ検診はしてもらわなくてもよいという人も相当数あった。在宅検診を行った24名をみると、高齢の人にADLの自立の難しい人が多く、80歳以上の人では5人全てがバーテル・インデックスが85以下であり、加齢の問題は今後ますます重くなると考えられた。

介護の状況をみると、症例1はB I 5点、10数年前に松葉杖での歩行から臥褥状態となったが、息子夫婦、

特に息子の嫁の献身的な介護が行われていた。症例2は脳梗塞による片麻痺を合併しており、80歳になる夫が介護していたが、負担の重い老々介護であり、地域での支援が必要と考えられた。症例3は両下肢の拘縮があつて家の中を這って動いているが、娘家族と同居して入浴などの介助は娘が行っていた。症例4は独り暮らしで松葉杖での移動であるが、週1回のヘルパーと近くに住む妹の援助によって在宅の生活が可能となっていた。

B Iが80の2人(症例5、6)はADLは自立できていて必要なときは家族の援助が得られるために、在宅での生活が可能であった。B Iが85の独居の2人(症例7、8)は買い物などをやってもらえれば家の中で自立するだけのADLは保たれていた。B Iが90以上の者はすべてADLの自立ができていて、通院や外出などのときに家族が車で送り迎えしている者もいたが、在宅での生活に支障はなかった。

島根県は若者が都市にでて核家族化が進んでいると言われるが、今回の調査では、独居者5人、夫婦のみ